

「交換」、あるいは出来事のゼロ地点 —— 柄谷行人における「形式化」の行方

宗近真一郎（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

2016年の出来事の背後にあるもの

2016年、大方の予想を覆す二つの出来事があった。一つは、6月に行われた英国の国民投票でEU離脱支持が残留支持を上回り、今後2年をかけて離脱することが決まったことである。この事態による地政学的な不透明性を確認した為替、資本の市場では、ドルやユーロが売られ、昨今はリスク回避通貨という位置付けにある日本円が急騰し、金利が上昇した。また、議会の安定化を狙って国民投票をけしかけた当事者である首相のキャメロンは辞任に追い込まれた。

だが、英国と大陸ヨーロッパとのクラックは今に始まったことではない。ヴァレリーがヨーロッパをユーラシア大陸の半島に過ぎないと言って（ヨーロッパ）精神の危機を喧伝したときも、ハイデガーがヨーロッパは万力に挟み込まれていると危惧した時も、英国は「ヨーロッパ」から外されていた。そこまで遡らなくても、2011年12月のEUサミットにおける財政規律の統合をキャメロン政権の英国だけが拒絶している。シティ（ロンドンの金融街）をめぐる規制と金融緩和との衝突という実利が作用しているが、より深いところで米英枢軸と大陸ヨーロッパとの対抗関係や全「ヨーロッパ」をめぐる英独のせめぎ合いが伏在するのである。

ドイツの権勢を懸念し今回の事態を予測していたエマニュエル・トッドは、英国人はドイツ人に従う習慣がなく、ドイツ的ヨーロッパよりダイナミズムを維持している「英語圏」、つまりアメリカやカナダなどの旧イギリス植民地である「大英帝国」の領域に親和すると述べ、アメリカの覇権はこの出来事を契機に更に低下すると論評した。また、保守的英国人にとって、今日のヨーロッパ大陸にはバルカンの亡霊が跋扈

しており、EU本部の所在するブリュッセルは新たなイスタンブールであり、自由を脅かす専制政治の帝都だという判断が潜んでいる。そのように、英国のEU離脱は、過去および未来の世界史のテキストに折り込まれていたのだ。

それでも、英国国民投票の結果に市場一般は驚き、ある意味で失望し、リスクが拡大していると認識したのは、大方の予想の背後にリスク・オフの志向性があるからだ。過去および未来に亘る世界解釈よりも、米国とロシアに挟まれた半島としての全ヨーロッパが飛び地のような英国を含むかたちでヘゲモニーを維持することを、線形的な変動を黙契とする市場経済の参加者が期待し、その期待が予想のマジョリティという最低限の牽制を試みた。だが、その牽制には根拠も自立性もなかった。予想のマジョリティは、それが外れた場合に生じるであろう非線形的な市場の混乱というリスクのイメージに依存したに過ぎない。リスク・オフはリスク・オンと張り合わされて、初めて全体を形成する。この場合、可能的なリスクが意味形成力を担ったのである。

同じように、11月の米国大統領選挙でドナルド・トランプがヒラリー・クリントンを破り次期大統領に決まったという二つ目の出来事も、大方の予想が外れた場合のリスクによって意味づけられ、例えば、日本の現政権は狼狽したまま、まともな対話のプロポジションを構想できていない。つまり、具体的なリスク・シナリオを殆ど誰も想定していなかったことが明らかになり、予想のマジョリティもその丸腰を指弾することが出来ない。

ところで、2016年9月のディベート以前に、映画監督のマイケル・ムーアはトランプの勝利を断言していた。中西部でトランプが競り勝つ、白人男性の鬱積、クリントンの基本的な不人

気、サンダース支持者票の動向、ジェシー・ベンチュラ（プロレスラー出身のミネソタ州知事）現象の再現というムーアの分析のポイントは緻密で説得的だったが、当時は注目されなかった。しかし、特に、白人男性の怒り、ジェシー・ベンチュラ現象の二点は、メキシコ国境に壁とかイスラム教徒の入国審査厳格化とかTPP否認などのトランプの幼稚な公約への解釈よりもずっと内在的だった。つまり、それくらいに米国は疲弊し、もはやポリティカリー・コレクトで虚飾する余裕などないのである。政治的なコレクトネスではなく、投票行動は無謬なイロニーにすり替わった。

その意味で、トランプの勝利の意外性は、英国のEU離脱が離脱しないという予想のマジョリティに張り合わされた可能的なリスクの意味作用とはやや異なっている。英国は歴史的に既にEUから離脱しており、今回の投票では、リスク・オフが仕切っていた予想のマジョリティが前提とする因果律が脆弱であったということだ。これに対して、トランプの勝利は、プロレスラーあるいはジョン・ウェインのような破天荒なマッチョを呼び出さねばならないくらいに、政治というものの現実世界への順当な回路としての効力が償却され尽くしたことの現象である。だから、政治は当面のところフロンティアのような偶発的な混沌へと退化することが避けられないだろう。

この非政治的、偶発的な混沌は米国のドメスティックな政治シーンに被覆されているが、トランプへの非政治的な期待は、かつてレーガンが冷戦終焉の立役者と評価されたように、トランプがブッシュ・ジュニア以来の米国の軍産複合体支配を断念させるというグローバルベースの可能的な評価に釣り合っている。トランプのプーチンへの親近を考慮して、ロシアを敵視していたドイツやフランスが対露協調に転換し、やがてNATOが自壊するというシナリオは十分に現実的だ。オバマが正攻法ではどうしても実現出来なかった目標を、トランプはレーガンの「後継」として無作為にやり遂げてしまうのである。

「形式化」と「交換」

この無作為は、ヘーゲルが「歴史哲学」で世界史における主観的意志の闘争を超越する理性的意志の位相を描いた「理性の狡知」の自己展開というべきだろうか。フランス革命がナポレオン・ボナパルトの帝政を析出したように、オバマ政権の8年がレーガンの後継のようなトランプを生み出そうとしている。だが、英国のEU離脱が、既に歴史に書き込まれていた出来事から偶発的に分節されたリスクの表象に過ぎないように、トランプの勝利は、非政治的なモメンタムが政治のコンテクストに現れた偶発性において、「歴史」の「本質」（ヘーゲル的な理性の自己展開）からは疎隔している筈である。

いまや、覇権国家の大統領選挙だからといって、ヘーゲル的な「歴史」の本質に関与するとは限らない。「同一性や即自存在が人間において広義の動物性として、すなわち人間における所与のものや生得のものや受け継いだすべてとして「顕在化する」ならば、そして否定性や対自存在が闘争と労働という否定する行動として実現される人間的な自由として世界のうちに「現われる」ならば、総体性や即自かつ対自的存在は人間の「現象的」次元において歴史性として「開示」される。実際、闘争し労働し、かくして動物としての自己を否定する人間は本質的に歴史的な存在者であり、このような人間だけが本質的に歴史的でありうる」（アレクサンドル・コジェーヴ『ヘーゲル読解入門』上妻精他訳、国文社）というアレクサンドル・コジェーヴのヘーゲル解釈にある歴史的な存在者の条件を誰が満たすのか。闘争と労働を包括する人間の「現象」には、不動産を転がして巨利を得たトランプに準えずとも、ただ「交換」だけが代置される。EUもまた、通貨や域内関税を含む「交換」をめぐる統合のフレームワークである。ヘーゲル的な歴史的な存在者、あるいは、歴史の本質性を担う人間は「交換」の遍在とともに消滅したのだ。

従って、「理性の狡知」に対して、「交換」によって動物性と自然性を内在的に拡張した人間によるもう一つの「狡知」が想定されるとすれば、それは、理性的意志の実践主体である歴史的な存在者による歴史の本質性の完遂ではなく、動物性や自然性によって反復（永劫回帰）される構造的な世界像であると考えられる。柄谷行

人が、『世界史の構造』以降の「交換様式」論の輻輳のなかで「理性の狡知」に對置した「自然の狡知」は、ヘーゲル的な本質論では対応困難な現代世界の課題への画期的なアプローチに違いないが、ヘーゲルを異化したかたちで人間の動物性と自然性が復権されたというコンテクストにおいてバックアップされるのは大凡その半分であろう。この場合、「闘争」や「労働」が「交換」へと「歴史的」に揚棄されたということではない。また、かつてボードリヤールが述べたように、「生産」が終焉して「消費」に制覇された世界の象徴性として、「交換」が際限のない蓄積の合目的性と共犯的な経済学に死が宣告されるということでもない。「闘争」および「労働」をともに「交換」として統覚する位相として世界と世界史が成立するということだ。柄谷が「交換」を下部構造だというのは、その意味である。

残りの半分は、「歴史」を、理性を絶対化するための爬行的な囫として理性に服従させるのではなく、カントが人類における「完全な市民的連合」のための「自然の計画」の試行のフレームとして「永遠平和」に先立って提示した「普遍史」を実践する人間の属性としての「自然」として捉えることである。柄谷行人によれば、この「自然」は、「目的の国」である「世界共和国」への道程の必然性と、人間の本性としての「非社会的社交性」（攻撃性、戦争）という両義性を帯びる。「このような逆説的・弁証法的な考え方は、ヘーゲルの「理性の狡知」に対して、「自然の狡知」と呼ばれることがあります。しかし、「理性の狡知」が神学的議論の言い換えにすぎないのに対して、カントの「自然の狡知」は唯物論的なものです。だからこそ、それは後期フロイトの認識を先取りするものとなりえたのです」（柄谷行人『憲法の無意識』岩波新書）。

永遠の平和を完遂する主体は、実は人間ではなく「自然」であるというカントのベシミズムは、唯物論的であるとともに非本質的、構造的である。いいかえると、「普遍史」における出来事は、通時的な因果関係の連鎖から断ち切られており、後期フロイトの反復強迫のように「原父殺し」が罪責感へと偶発的に転じた表象（何もないところから現れる倫理的な何かの強度）に等しい。抑圧されていた原初的な攻撃性は、

弱体化した「本質」の防衛機制を破って超自我の世界模型を析出するのである。

ところが、柄谷行人は、「交換」の内在的な原理を問うことによってではなく、「交換様式」の複合（変形と接合）の推移を構造的に捉えることによって、超自我の世界模型として立ち現れる「普遍史」を「世界共和国」を析出するための社会構成体の変遷（「歴史」ではない）として描き出そうとした。だから、「交換といえば、商品交換がただちに連想される。商品交換の様式が支配的であるような資本主義社会にいるかぎり、それは当然である」（『世界史の構造』より）という以上の理念規定はない。「形式化」において、自己言及を呼び込んでしまう定義は無用なのだ。一方、「交換様式」について、マルクスの史的唯物論の中核のジャルゴンである「生産様式」の認識上の欠落を指摘するかたちで、「たとえば、原始氏族的生産様式という場合、それは狩猟採集というようなこと——人間と自然との関係——を指すものではありません。それは、生産物が互酬によって全員に配分されるような生産の様式——人間と人間の関係——を指します。であれば、それは生産様式というよりも、「交換様式」と呼ぶべきだと思います」（柄谷行人『世界共和国へ』岩波新書）と述べる。カントは「普遍史」の稼働主体を「自然」と呼んだが、柄谷は「形式化」を訴求するにあたり、「人間」を呼び戻している。

ここには、「形式化」の意志が二重に作用している。まず、「生産」（「労働」と「闘争」その他）は、大岡昇平の原作に痛烈な解釈を加えた塚本晋也の「野火」で戦場のジャングルが過剰な「交換」の場として現れるように、すべて「交換」へと包括される。次に、語られるべきことが「交換」そのものではなく「交換」・「様式」であることである。「交換」は「形式化」の鏡のように現れるが、「交換」・「様式」と言われることによって、すぐに「様式」=「形式」のサブジェクトへと後退する。互酬、略取－再分配、商品交換、Xという「様式」にそれぞれ符合するミニ世界システム、世界＝帝国、世界＝経済、世界共和国という社会構成体をめぐって、「私が目指すのは、複数の基礎的な交換様式の連関を超越論的に解明することである。それはまた、世界史的に起こった三つの「移行」を構造

論的に明らかにすることである。さらに、そのことによって、四つめの移行、すなわち世界共和国への移行に関する手がかりを見出すことである」(柄谷行人『世界史の構造』岩波書店)と述べる柄谷において、「形式化は、指示対象・意味・文脈といった外部性を還元し、意味のない恣意的な形式的関係(差異)と一定の変換規則(構造)をみることである」(柄谷行人『内省と廻行』講談社学術文庫)と書き起こされた。「本質的な何か」や根源への問いが形而上学を形成するアポリアの乗り越えを試みた「言語・数・貨幣」(1983年公表)が四半世紀を経て受肉されたと言ふことが出来る。

「形式化」か「本質」の遂行か

柄谷行人が「形式化」についてまとめたかたちで最初に論じたのは、1981年9月公表の「形式化の諸問題」である。そこでは、「形式化」について、マルクスの「貨幣(交換)の形而上学」は「形式化」を導入したが、「交換」という場の自己言及的なパラドクスのため「決定不可能性」に陥った姿が描かれた。それを引き継いだ1983年公表の「形式化と現象学的還元」では、レヴィ＝ストロースの形式体系に張り合わされた「無一根拠性」と、「根源」の拒絶というデリダの戦略に言及しつつ、その「形式化」の戦略がすぐに特権化(本質化)されてしまう凡庸さへの自覚を唱導したところで途絶した。

柄谷は、「形式化」をめぐる思考が「言語・数・貨幣」まで来て情熱が失われ中絶され、本人はアメリカに逃げたという下りを1985年5月公表の「批評における盲目と明視」と題された対話で加藤典洋に開陳している。この対話は、批評家の自己意識(社会性を帯びることへの反発)について加藤が独白するようにして始まり、その気分の「落ち込み」をめぐる、最初は素っ気なく聞き流していた柄谷は、やがて、70年代初頭の連合赤軍当時の何事も「カッコ」で括ろうとする日本の言説空間の自閉に触れ、批評とは「カッコ」を外し、システムの外に出ることだと語り始めた。

植谷雄高を、「自同律の不快」は「自己差異化」のナルシズムであると批判し、吉本隆明について、自分は50年代の彼の延長線上にいるが

「いまの仕事は困るんだ」という本音も現れた。また、「亡命の用意」という一つの批評形態の選択や形式体系を内部から爆破するという比喩を持ち出して批評家には度胸がいるという風に忌憚を崩した。加藤が「明視の果てに盲目があって、盲目の果てに明視を見るというところまで、柄谷さんは行かれている」(柄谷行人『ダイアローグIII 1984-1986』第三文明社)とエールを送り、対話は、批評家であることの相互の課題の中心をリスペクトし、本音のコミュニケーションが果たされた。繰り返すが、この対話で柄谷が腹を割るように語った「形式化」の挫折は、四半世紀後の『世界史の構造』で蘇生し、「交換様式」として賦活されたのである。

だが、周知の通り、柄谷行人と加藤典洋の批評家、言論人としてのポジションはいっかんして対立的である。知る限り、正面を切って論争されたことはないが、加藤はデビュー当時から柄谷や浅田彰のポストモダン思想の輸入に批判的であり、方や柄谷はある座談では偽悪的に加藤を「全共闘崩れ」と見下し、ラカン的なねじれ(例えば、「抑圧の不在」が抑圧に抵抗する者を抑圧するという構造)を敷衍して加藤の「敗戦後論」の情念的な論調を揶揄したこともある。

確かに、批評のタイプは対照的である。同時多発テロをめぐる2002年の吉本隆明との対談では、吉本から「存在倫理」(人間が存在すること自体によって喚起される倫理)というジャルゴンを引き出し、震災後は反原発の立場で渾身のフィールドワークを遂行する加藤典洋は「戦後」の現実の総体的状況における「本質」を追求している。一方、柄谷は近著『憲法の無意識』で、憲法九条をめぐるフロイトの反復強迫論を導入しつつ「九条における戦争の放棄は、国際社会に向けられた「贈与」なのです」という斬新な解釈を提示したが、それは、「交換様式」をパラメーターとして「世界共和国」、「世界史」、「帝国」を「構造」の側から訴求し、国家の揚棄を図る超越論の持続が「形式化」を輻輳的に反復することによって析出した超越的な「現実」だということができる。

ここで、問題は、批評(思想)が取り組むべき「現実」というものの位相とは何か、「現実」を迎撃する強度はどのように統覚されるか、「現実」として生起する「出来事」に批評(思想)

はどうコミットするか、ということになる。そのコミットメントは、全現実への否定性あるいは脱構築性を呼び込むかたちで「批評性」として現れると考えられる。柄谷と加藤の対立は、個々の状況的な事象に関してプロスかコンスかということとは異なる。また、価値判断というプロセスの有無や、プラグマティックかそうでないかということでもない。より柄谷行人にフォーカスするなら、「交換様式」をめぐる「形式化」の実践、自らを世界というテキストにおける意味の「決定不可能性」に追いつくこと、「本質的な何か」の構図を転倒するアプローチに、全現実への召喚がありうるのか、と問うことになる。

加藤典洋は「提案」し、 柄谷行人は「発見」する

憲法九条、反原発などの事項について、柄谷と加藤の批評性のコントラストは明らかである。例えば、1991年11月の講演で柄谷は、憲法九条が外的強制であることについて、「この九条は、あとから日本人によって「内発的」に選ばれたものです。「あとから」ということが、大切です。「最初から」であれば、それはとうに放棄されています。私が主体的とか自発的という言葉を用いないのは、このためです」（柄谷行人『〈戦前〉の思考』文藝春秋、柄谷行人『憲法の無意識』岩波新書）と述べ、自衛隊の海外派兵について「こういう状態は危険です。自衛隊を文字どおり「自衛」に限定されたものとして憲法上確認すべきだと思います。いうまでもなく、それは現憲法を「原理」として確立するためです。（中略）「強制」によることこそがその普遍性を証明するのです」（『〈戦前〉の思考』）と処方方を明示した。一方、平和条項をめぐる護憲と改憲の議論について、加藤典洋は、1995年1月発表の『敗戦後論』（講談社）で「わたし達は「強制」された、しかし、わたし達は根こそぎ一度、説得され、このほうがいい、と思ったのである。とすれば方法は一つしかない。強制されたものを、いま、自発的に、もう一度、「選び直す」、というのがその方法である」と記した。

趣旨としては、両者とも平和条項を「原理化」しようとしている。だが、加藤がその根拠

を主体性（自発性）に置いたのに対して、先行する柄谷は「強制」（表象としての服従あるいは、ラカンの相互受動性から〈大文字の他者〉へ）から普遍性を逆証しようとした。加藤が平和条項をサブジェクトとして「主体性」を確保しようとするのに対して、柄谷は「普遍性」を志向して出来事の機序を転倒するのである。先に触れたように、「強制」が逆証した九条の普遍性は、『憲法の無意識』では、国連がその実行を宣言することによって「純粹贈与」としての力を得るというイメージへと充進される。

では、その国連についてはどうか。柄谷の普遍志向は、「つまり、カントがいう諸国家連合は、本来、平和論ではなく、市民革命を世界同時的なものにするために構想された。このことに気づいたとき、マルクスがいう「世界同時革命」と、カントがいう「諸国家連邦」が僕の中でつながったのです。カントの「永遠平和」という理念は、国家と資本の揚棄を意味します」（柄谷行人『柄谷行人インタビューズ 2002-2013』講談社学芸文庫）という発言に集約される。「非社会的社会性」においてせめぎ合う国家が統整的理念としての「世界共和国」を析出する「自然の狡知」が「世界同時革命」と交差する普遍イメージが生成する超越論的主観のドラマというる。

加藤典洋の国連へのスタンスは、ドメスティックなものだ。すなわち、「私が、いま考えるのは、この四六年の憲法審議のうちに現れた第三の道——国連中心主義のうちに憲法九条の理念の実現の回路を見出す——を手がかりに、国際秩序から孤立するのは逆に、国際秩序の構築に積極的に関与することで、対米自立を成し遂げるという提案にはかなりません」（加藤典洋『戦後入門』講談社）と記されるように、何時までも続く「戦後」と「対米従属」を、「憲法九条」の理念を媒介にして国連中心主義へとキャリアすることで終息させるということである。ここで、柄谷の普遍主義と加藤の局地主義のコントラストは際立つ。と同時に、国連の可能性をめぐって、両者は接近遭遇している。ただ、批評活動の端緒から日本という局地に立ち続ける加藤にとってのメルクマールである「アメリカの影」は、柄谷にとっては、1870年代以後の帝国主義が復元された「新自由主義」のなかに解

消しているのである。

つまり、加藤は「提案」し、柄谷は「発見」する。加藤にとって、批評（「提案」）の他者性は、彼が『敗戦後論』で言及したゲヘナで身を滅ぼす者への畏れとアーレントが描定した公共空間における可能的な「公民」への友愛というレンジに符合する。言論人としての影響力が高まっている近年では、政府の政策ブレーンも「提案」の射程圏にあると想定しうる。柄谷は、ハイデガーが芸術作品の根源を被伏蔵性に見出したように、現実が世界へ立ち現れる「形式」を単独的に見出すのである。湾岸戦争時のインタビューにおける「しかし、ぼくは、むしろ「戦前」の意識、今後に来るであろう「戦争」の前に立っているという意識なんです。（中略）われわれが今「戦前」に立っているのだとすれば、それに対して何ができるのかが問われているはずです。戦後民主主義を軽蔑しそれを乗り越えるという連中は、まだ「戦後」の意識のなかにとどまっていたいんでしょう。ぼくには、「戦後」の意識はまったくありません」（前出、『〈戦前〉の思考』）という挑発的な歴史認識の転倒は、その当時も今も単独的であるに違いない。加藤典洋が輻輳的に内在化しようとする「戦後」認識の重厚なアルシーヴに対して、反世界からのエコーズのように反復される柄谷行人の単独性は揺らぐことが無い。

加藤典洋は近著『日の沈む国から』（岩波書店）の第4章「「災後」のはじまり」で「有限性と無限性の地と図の関係が反転すると、その先にやってくるのは、「無限性」と「有限性」それ自体の一对性であり、そこでは、「暗さ」はもはや暗さではなく、私たちがそこに生きなくてはならない薄暮であり、「明るさ」ももはや明るさではなく、私たちがそこに生きなくてはならない薄明なのだ。「祈念」と「配慮」とは、その「無限性」の希求、そして「有限性」の受容という対位の別名なのである」という比喩的な総括に続けて、カンタン・メイヤースの『有限性の後』を詳しく紹介している。

メイヤースの著作も併せて参照し、アウトラインを押さえてみる。カント以降の哲学思考は「相関主義」（思考と存在——祖先以前を含む対象性——の「相関」だけがアクセス可能であり、どちらか一方だけへのアクセスは不可能

であることを前提とする思考傾向）という「有限性」の「透明な檻」に閉じ込められている。例えば、「超越論的主観がしかじかの身体をもつということは、経験的なことである。だが、超越論的主観が身体をもつということは、それが場をもつ＝発生するための非－経験的な条件なのである。身体とは、認識の主体の「前－超越論的」条件であると言うこともできる」（カンタン・メイヤース『有限性の後』千葉雅也他訳、人文書院）ように、超越論は「非－経験的な条件」に拘束されることによってのみ、その主体を描定しうる。「物自体」が無矛盾であり、それが確かに存在するというカントの「アプリオリ」は「相関的循環」であり、『究極的存在者』の絶対的必然性のテーゼも、また、あらゆる事物の絶対的偶然性のテーゼも、両方を無効にする」（同前）ことによって、「存在」の「真」の多数性を問うことが出来なくなった。「相関主義的コギト」を乗り越え、「別様である可能性」を思考に呼び出すのは「思弁的実在論」しかないと言え、メイヤースは述べる。

「有限性」は、「災後」に露出した「有限性の近代」であり、それと不可分である世界認識自体の「有限性」である。加藤は、そう記してはいないが、メイヤースへの言及は明らかに柄谷行人への批判を伏在する。メイヤースのカント批判は、そのまま、加藤において「原発があるかぎり、われわれは、未来の他者であれ現在の他者であれ、「他者をたんに手段としてのみ扱っている」ことになります。原発だけではない。「他者をたんに手段としてのみならず同時に目的として扱え」という道徳法則は、資本主義経済においては成り立たないのです」（柄谷行人『政治と思想 1960-2011』平凡社ライブラリー）と語る柄谷的な思考フレームの批判へとドライブされるに違いない。どういうことか。二人の対話から四半世紀を経て賦活された「形式化」という「場」で「思考」が専横し、「存在」（対象性）との「相関」において、コギトの無限性が普遍主義として現れ、「存在」（全現実）がスコラ的一義性に収束してしまうという事態への異論に他ならない。

出来事（全現実）への回路

だが、メイヤスーに追い撃たれるのは、柄谷行人だけではない。加藤にとって、柄谷のいう「戦前」の思考が「大なる外部」として意識の閉域を生成したであろうように、「戦後」（あるいは、その終わり）を前提（絶対的な対象性）として語ることの臨界、例えば、対米自立をドイツ的な「信頼圏」の導入によって乗り越えようとすればするほど批評の射程がドメスティックに錐もんでゆく症候をどうやって「直接性」へと切り返すのか。加藤のレファレンスには見当たらないが、柄谷行人を最強のレファレンスと位置付けるスラヴォイ・ジジェクは、『ポストモダンの共産主義』（栗原百代訳、ちくま新書）で、そもそも寄生的であるリベラリズムと原理主義が互いに相手がいなければ成立しないイデオロギーの悪循環を断ち切るには、「すべてを失う危険」にさらされ「思考による存在証明ほどにはかなげなプロレタリアート」をラディカルな概念に再構築すべきだと述べる。資本制国家を動かすラディカルな「外在性」は、自己革命を続ける流動体である国家と距離をとるのではなく、「国家自体を非国家モードで機能させることだ」と記す。

そのためには、自由の「形式性」をその「本質」の砦とすべきであるというジジェクは「もしも——偶然に——ある出来事が起こると、そのことが不可避であったように見せる、それに先立つ出来事の連鎖が生み出される。物事の根底にひそむ必然性が、様相の偶然の戯れによって現れる、というような陳腐なことではなく、これこそ偶然と必然のヘーゲルの弁証法なのである。この意味で、人間は運命に決定づけられていながらも、おのれの運命を自由に選べるのだ」と言う。「抑圧されたものの回帰」が遍在する世界では、出来事には出来事への欲望の連鎖が伏在している。反復強迫とはそういうことだ。出来事は欲望の対象性である限り、過去ではなく未来完了の時間に属している。だから、「アプリアリ」が措定する実践（倫理）は、「時間を超えて未来に追いつき、向きあって、実現して欲しい未来がすでにそこにあるかのように、いま行動する」ために反復される「直接性」に他ならないのである。

参考文献（本文中に引用しなかったもののみ）

エマニュエル・トッド『問題は英国ではない、EUなのだ』（堀茂樹訳、文春新書）

柄谷行人『隠喩としての建築』（講談社）

ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』（今村仁司他訳、筑摩書房）